

ポールクロードルが言って、そのことに對してポールバレイもその通りだということを書いてるんです。他にも多くの人が日本の素晴らしさを褒め称えているんですが、その方たちは日本の上流階級の人たちを見て褒めたんじゃないんです。街で普通に生活している人たちを見て褒めているんですね。名前は忘れましだけれども、ある旅行者が無人駅に着いたとき、駅前に人力車が三台並んでいて、そのどれかに乗ろうと思つたとき、「きつとどの車に乗せようと思つたとき、車夫が黙ってあみだくじを引いて、当たった人の車に乗ったとき、残りの二人の車夫は何事もなかったかのように見送っていて、他の国ではありえないことだと表現しています。そういう何でもない普通の生活の中に、日本人はたくさん美德を持っておりました。美德はたくさんあります、下村湖人は四つあげています。忍耐、謙讓、日本人特有のものですね。次が調和です。もう一つは勇氣。この美德はある土台に支えられていないと保てないんです。忍耐が壊れてしまうと怨恨の源になる。我慢しきれないと人を恨み、憎みま。謙讓は卑屈になる。調和は妥協に過ぎない。勇氣は粗暴になる。今、日本で起きている犯罪のほとんどが忍耐心がないか、それが脆いか、弱いかですぐに人を恨む、社会を恨む、国を恨む、家族さえ恨む。多くの犯罪の源になっています。忍耐、謙讓、調和、勇氣、この四つの美德を支えているものは何か。美德が壊れると悪徳に変わる。

悪徳の世界にいる人がいかに多いか。この美德を支えているもの、土台は「愛・思いやり・他者への配慮」。これがある人はいつまでも美德を持ち続けて行くことができるといふ教えでございました。私は「青年のための思索」からたくさんのごことを学びましたけれども、これ一つ（美德について）学んだだけでもよかつたと思つています。何故かと言いますと、当時（昭和20年頃、相談役33歳の頃）私は東京へ出てまもなくで、先輩からずいぶん痛めつけられたり、いろいろな目に遭つておりました。東京に出て体験したことは、「世間には鬼はいないが鬼のような人はいっぱいいる」とつくづく思いましたね。鬼は見たことはないですが、鬼のような人はいっぱいいる。その時、私はどう思つたか。私は人から「あいつは鬼のようなやつだ」と言われるような人間には絶対ならぬ。しかし、ある意味では鬼、「掃除の鬼」になろう。掃除については鬼と言われるくらい深めて取り組んでいこうと。そういう意味での鬼ならばいいと思います。残念ながら今の日本は、心のない、人を愛する気持ちがない、思いやり、配慮もない、そういう意味での鬼のような人がいっぱいいるんです。世の中よくならないですね。ほんの数人ですけども、仏さまではないですけど仏さまのような人にも巡り会いました。お陰で今日まで生き続けることができました。それは仏様のような方といういろいろな出会いをしてきて、私を支えてくれて、それが苦しさを乗り越えるエネルギーになつてきたんです。

【編集後記】コロナ禍で閉塞感があり暗くなりがちですが、あるテレビ番組で所ジョージさんが話されていたことが心に刺さり、気持ち軽く、明るくなりました。『勝つと思うな！勝ちだと思えば全部勝ち。』競争社会では相対的評価で順位が決められ、成果に応じたりターンがあり、それが頑張り、糧となる人もいればストレスの種になる人もいます。「〇〇でなければならぬ」と追い込み過ぎちゃうと行き詰まっちゃいますね。相対評価ではなく自分で決めたことをやり通すことが大事だと思います。また、「女性の仕事と育児の両立について」は育児と仕事の両立はできません、ときっぱり言い切っています。『子育ては大変、精神的にもね。仕事と育児の両方をやるうとしてのわけ。半分の評価で100点と思えばいい。つまり、仕事50点、育児50点、両方足して100点になるという考え方。自分の一生懸命さを半分にしちゃだめだよ。半分でいいんだからっていう態度は絶対ダメ。一生懸命さは100で評価は半分ずつでいい。こつちを100、こつちも100にしようとすることに無理があるね。両方二つやったら、どちらも完璧を目指そうとしなくてもいい。自分の一生懸命さが100だったら問題はない。だって二つやったらだもん。』私自身振り返ると全てのこと、100の一生懸命さじゃなかったけど、いろいろなご縁に助けられて今日があります。100の一生懸命さを支えるエネルギーは「気づきと感謝」。感謝するから人は幸せになれるんです。高野修滋 拜

# 便教会新聞

第169号

令和4年3月

便教会は、教師の教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高め

便教会新聞発行責任者 高野修滋  
〒445-1080  
愛知県西尾市米津町天竺桂二七  
T/F 〇五六三-一五六-四三二七  
携帯 090-4215-1727

## 『自分が経験したトイレ掃除を通して』

愛西市立佐屋中学校  
教頭 鈴木 準一郎

まず最初に、昨年度、本校PTAによる校内環境整備活動の一つとしてトイレ掃除を計画しましたが、新型コロナウイルスの影響により残念ながら中止を余儀なくされました。今年度は、一年越しで令和三年十一月に本校PTAをはじめ、「西三河掃除に学ぶ会」の全面的なご支援をいただきながら実施できたことに感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございます。

私がトイレ掃除と出会ったのは、二十年前ほど前に勤務していた初任校である一宮市の中学校の当時の教頭先生に「トイレ掃除に行くぞ」と声を掛けられ、岐阜県郡上市まで出掛けたことがきっかけでした。その当時はトイレ掃除のことは全く知らず、イエローハットの創業者である鍵山秀三郎氏が始めた活動であるという程度で、あまり深く考えずに出掛けたことを覚えています。しかし、実際に活動に参加すると「トイレ掃除は心磨き」という言葉に自身が動かされるとともに、清掃用具の数の多さに驚き、作業手順や使い方、後片付けの方法に「なるほど」と納得させられました。当たり前

のように、素手で便器に触れることに抵抗感はなく、黙々と作業を行ったことを記憶しています。ただのトイレ掃除だと思つていた私に、トイレがきれいになるだけでなく、トイレ掃除を通しての気づきや価値を新たにしてくれました。

その後、現在勤務している愛知県海部地区へと異動しました。その赴任校では生徒指導の課題に直面しました。生徒指導担当として、毎日のように生徒と対峙し、ただがむしゃらに指導を行つていました。なかなかうまくはいきませんでした。一つひとつの指導に従わせるには、子どもたちが納得する理由が必要だと感じていました。

多くの学校では、学期末や年度末に大掃除が計画されます。子どもたちが毎日当たり前のように、何の意義を感じず、先生たちにやらされている感を強く持つていられると思われ、清掃活動に、何とかして少しでもその意義や価値を見出してほしいと思ひ、そこで最初に思い出されたことが、初任校で教頭先生に誘われたトイレ掃除の経験でした。「日本を美しくする会」のホームページや鍵山秀三郎氏の著書の内容を参考に、生徒指導だよりや学年通信などに、鍵山氏が掃除を通して自分たちの「心の荒み」と「社会の荒み」を無くすことを目指していることを紹介し、①謙

虚な人になれる ②気づく人になれる ③感動の心を育む ④感謝の心が芽生える ⑤心を磨くの内容を伝えました。何人の子どもにも響いたかは分かりませんが、ほんの小さなきっかけに過ぎなかつたかもしれませんが、当時の私自身には、これが精一杯だつたと思います。

海部地区の学校では、トイレ掃除を行っている学校が何校かあるようでしたが、私自身がその様子を耳にする機会は少なかつたです。久しく、「トイレ掃除」や「便教会」という言葉から遠ざかつていました。そうしていると、前任校の大治町立大治中学校でトイレ掃除と再会することができました。大治中オヤジの会が主催するトイレ掃除でした。私は、学校として参加者の取りまとめをしたり、「西三河掃除に学ぶ会」事務局との連絡調整を行わせていただきました。開催当日に向け、西三河掃除に学ぶ会の代表世話人である杉浦三代枝氏が現場確認のために来校されました。その際に「やりがいがあるトイレですね」とおっしゃられた言葉が印象的でした。大治中学校での活動は、西三河掃除に学ぶ会の関係者をはじめ、保護者や生徒、職員の方々に参加をしていただきました。活動場所を巡回しながら掃除の様子を見てみると、「これ！この活動、この手順」というような自身の経験や感覚が蘇つてき

ました。また、黙々と汚れた便器と向き合う保護者や子ども姿、狭いトイレ内で声を掛け合いながら協力して活動する様子を見て「ありがとうございます」という思いを強く感じました。親子で参加した保護者からは、「家では見られない我が子の姿を見るのができました」という声を聞かせていただき、トイレがきれいになるだけでなく、親子の絆を強くする活動でもあると感じた瞬間でした。

令和二年度となり、私は現在の勤務校である愛西市立佐屋中学校に異動しました。本校では、トイレの環境整備が長年の課題となっており、保護者や子どもたちからは、「臭いを何とかしてほしい」「新しく改修してほしい」などの声が多く寄せられていました。日々の清掃活動で子どもたちが便器を磨いたり、床を拭いたりしてくれていますが、なかなか完璧には至りません。そこで、PTA役員や校長に「西三河トイレ掃除に学ぶ会」の活動や私自身の経験を紹介させていただき、本校では、PTA主催による「校内環境整備活動」としてトイレ掃除を開催する運びとなりました。本校でも西三河掃除に学ぶ会の代表世話人である杉浦氏に現場確認をさせていただきました。校舎や体育館、武道場の全ての場所を入念に確認していただきました。やはり「やりがいがあるトイレですね」と聞き覚えのある言葉が返ってきました。しかし、新型コロナウイルスが猛威を振るい、やむなく中止を決断しました。年度が替わり、今年度もPTA行事として、トイレ掃除を計画し

だろう、きれいなところならもしくは洋式トイレかもしれないと考えていました。もともと自ら進んで参加しようと思っていなかったため、当日の掃除が始まるまでずっと抵抗感がありました。

各班に分かれ、トイレに入る時、つんとしたトイレのにおいに少し「うっ」となりました。女子トイレとはちょっと違ったにおいのように感じました。結構臭うトイレの中で小機器掃除が始まりました。普段使わない小機器。磨き始めているときでも、「どうして普段使っていない、今後でも使うことの一切使うことのない小機器を掃除しなくちゃならないの」と思っていました。しかし、掃除の仕方だけではなく、スポンジで濡らして、とれなければ、緑のナイロンたわしを使って、それでもだめならサンドメッシュを使うといった掃除の道具の使い方を教えていただいていた掃除をしていくとどんどん汚れが落ちていき楽しくなりました。

パッと見たときは、綺麗そうな小機器でしたが、「さあ磨こう」としゃがんでみると、水垢や尿石などの汚れが見えて驚きました。

小機器の流れる穴を見ると尿石がこれでもかというほどこびりついていました。その穴から出てくる臭いは何にもたとえられない臭臭でした。集中して尿石のついた穴をマイナスイオンバーのような道具で根気よく落とすといくと尿石や茶色い汚れ（水垢）が取れ、白くなる便器が見えてきました。

始まる前は、あんなにも嫌だったのですが、知らないうちに嫌なことや匂いのことは忘れ、便器に頭を突っ込んで汚れを探して磨いていました。ここまでと言われたときには「まだ磨き

ていただきました。様々な行事を計画するにあたり、新型コロナウイルス対策が心配されましたが、PTAや掃除に学ぶ会の関係者のご協力のおかげで、一年越しの開催を実現させることができました。私自身も久しぶりに便器と向き合いました。グループでの打ち合わせや説明時には、「うん、うん」と納得し、汚れが無くなり、便器が白く輝き出すにつれ「自分が磨いた便器が一番きれいになった」「もう誰にも使わせたくない」という変な自信と不思議な気持ちになりました。活動を終えた時は、参加していただいた皆様への感謝の思いと、きれいになったトイレを見た時の子どもたちの反応が楽しみでした。参加者からは、「実際に素手で便器に手を入れるのは無理」「トイレ内の人数を少なくできたら」という切実な声をいただきながらも、「汚れが取れていくうちにスッキリとした気持ちになり、もつときれいにしたいと思うようになった」「達成感を感じることができた」「日常生活で何かをするときには、何事にも意味があることを頭において行動したい」「ぜひ、この活動を継続してほしい」などの有難い声をいただきました。

昨年末の十二月には、初めて「便教会総会」に参加させていただきました。東海学園大学の学生さんや愛知工業高校の卒業生の皆さんの大きな心の変化は、先生方の指導の賜物であり、一人ひとりの人生の財産だと思えます。真にトイレ掃除の意義や価値そのものだと思えました。

教育現場では、コロナ禍による影響はもたかったな」と思うくらいでした。便器の掃除をした後に壁と床の掃除を行いました。洗ったスポンジを絞って丁寧に擦り、石鹸を付けたたわしを使って優しく床を磨いたりしました。

床の水気をタオルでとって片づけをした後、もう一度掃除をしたトイレに戻りました。すると、三時間前の臭いが嘘だったかのようなきれいな空気になっており、臭いの「に」の字もありませんでした。とても感動しました。

トイレ掃除を終えてみて、今回は梶岡先生のおっしゃっていた「見方が変わるよ」というのは本当なのかということに参加させていただきましたが、一見きれいに見えてもしゃがんで見ると水垢や尿石に気づきました。先生のおっしゃっていたことは、本当だったんだと思いました。今回の便教会で学んだ視点を変えるところは普段の生活でも生かすことができると思います。自分はよく考え込んでしまう癖があるので、今回便教会で学んだ「視点を変える」ということを大切に考え方やモノの見方を様々な視点から見えて考えていこうと思えました。

### 仏さまのような生き方

日本を美しくする会 相談役 鍵山秀三郎

私は22歳の時に下村湖人という人が書いた「青年の思索のために」という本を読みました。一冊百円の文庫本でございましたけど本当に価値ある本で、ボロボロになって再び買い直したときは47刷りになっていました。ですからいかにたくさん売れた本であるかがわかりますが、残念ながら今は

ちろん、ここ数年の急激な時代や価値観の変化を受け、変革が求められています。そのような中でこそ、私自身、学校関係者の「自分たちの学校は自分たちで」という思いや実践力と、トイレ掃除のように時代に影響されない不変的な価値があるものとうまく融合させ活動を実現させることが大切であると考えます。本校においても、いろいろな立場の方々のお力添えをいただきながら取り組んでいくことが多くあります。トイレ掃除もその一つです。今後も、関係者の皆様のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

### 『掃除で自分を見つめてみて』

東海学園大学養護教諭専攻 二年 黒田 菜々子

コロナ禍で、冬にトイレ掃除と考えたときなかなか行く気持ちにはなりませんでした。しかし、ゼミの担当の先生である梶岡多恵子先生が「しゃがんでトイレ掃除をすることで視点がかわって、見えるものがあるよ」「視点を変える大切さを学べるよ」と声をかけてくださり友達も参加するという事で一緒に行きました。

自分の担当するトイレの場所のメールが届いたとき、私は何かの間違いなのではないかと思えました。「黒田菜々子 男子トイレ 小」。参加する先生や先輩、同級生のほとんどの子は、女子トイレなのにもかかわらず自分は「男子トイレ」でしかも「小機器」の担当でした。どうして？と何度も思いました。私は、当然のように掃除する場所は「女子トイレ」で和式トイレ

絶版となっています。この本の中にとっても良いことが出てまいりましたので、一つだけお伝えさせていただきます。日本人は他の民族にはない「美德」というものを持っています。この日本人の美德というのは魏志倭人伝の中にすでに、日本人は嘘をつかない、約束を守って礼節を重んじる民族であるということが魏志倭人伝の中に登場しているんです。それから歴史が進み54年8月15日、日本に上陸したフランシスコザビエルが薩摩半島の貧しい人たちを見たとき、びっくり仰天したんです。「なんと素晴らしい民族であるか」。ザビエルは手紙を書いてインドのゴアという教会本部に送っております。その手紙が今でも残っていて、「この民族は、私が各地で見てきた異教徒の中で未だかつてない優れた民族である。この民族を征服したり、滅ぼしたりしてはならない。そういうことをすれば人類の損失になる」と書いているんです。近代になりますと1944年（昭和19年）、フランスのポールクロードとポールバレーリの対談が記録に残っております。その中でクロードがバレーリに対して「この地球上の中で滅びてはならない民族を一つあげるとすれば、それは日本人である」と。当時（第二次世界大戦中）、フランスと日本は敵対国ですね。日本とは直接戦争はしてないけれど、日本の同盟国ドイツと戦争しているという事はフランスはドイツに攻め込まれて散々な目に遭っていて、間接的に日本は敵対国なんですけども、その敵対国である日本人を滅ぼしてはならないということ